

Newsletter

March 2020

<http://www.aack.info>

目次

学習院輔仁会山岳部創立 100 周年記念会 学習院輔仁会山岳部 100 周年記念祝賀会について 芳賀孝郎1 私の学習院山岳部 芳賀孝郎3 学習院輔仁会山岳部と私 一同創立 100 周年記念に出席して— 平井一正5 学習院輔仁会山岳部 (GAC) 創立 100 周年に参加 して 横山宏太郎.....5 高村泰雄さんの逝去を悼む 酒井敏明7 図書紹介 『ブッシュマンの民話』(田中二郎著) 伊藤寿男10	記録的暖冬の 2019-2020 冬 横山宏太郎.....11 第 50 回雲南懇話会 講演概要 山岸久雄12 「第 51 回雲南懇話会」開催のご案内 — Yunnan Forum in Kyoto, May 2020 / 夢・好 奇心・探求心 — 前田栄三16 新会長に幸島司郎さん.....18 会員動向18 編集後記18
---	---

学習院輔仁会山岳部創立 100 周年記念会

学習院輔仁会山岳部 100 周年記念祝賀会について

芳賀孝郎

2019 年 11 月 30 日、学習院山岳部 100 周年記念祝賀会は、学習院 100 周年記念会館で開催された。学習院輔仁会山岳部は大学山岳部と高等科山岳部で成り立っている。100 周年記念の内容は下記の通りである。

I. 山岳部活動の写真・道具の展示

1. 高等科山岳部の活動の登山記録、写真その他登山道具の展示。
2. 講演に関する八方尾根スキー場、第三ケルンの建立者寺田健一の写真、映画「スキーの寵児」の唄の楽譜展示とヒッコリー(ノールウェイ製) スキーとトンキンストックの展示。

3. 皇族登山に関するコーナー

- 1916 年 8 月 東久邇宮の槍ヶ岳への露営地の写真
- 1920 年 8 月 朝香宮の劔岳池の平の写真
- 1924 年 5 月 秩父宮の立山登山の写真展示
同行の学習院・細川護立、渡辺八郎、前田利男、坊城俊良、岡部長量、慶応・横有恒、大島亮吉、三田幸夫の写真。
- 1925 年 8 月 竹田宮の劔岳長次郎雪溪の写真
4. 海外遠征の写真、記録と、当時使用した登山道具の展示

- 1925年 カナダ・アルバータ峰 (3619m) の初登頂
岡部長量・波多野正信参加時使用「シルクザイル」展示
- 1935年 加藤泰安 大興安嶺最高峰 (1835m) 初登頂
- 1953年 加藤泰安 第一次マナスル登山隊参加
- 1958年 加藤泰安 (副隊長)・芳賀孝郎 AACK チョゴリザ (7654m) 登山隊参加
- 1960年 川崎 巖 南極第5次越冬隊に参加
- 1962年 加藤泰安 AACK サルトロカンリ (7742m) 登山隊副隊長
- 1964年 アラスカ・ローガン峰 (6050m) 登頂西山稜の初登攀
- 1968年 パキスタン・ゴラッシュゾム峰 (6149m) 初登頂
川崎 巖 南極第9次越冬隊参加 南極点到達
- 1969年 八木 實 南極第10次越冬隊参加
- 1970年 松方三郎 エベレスト登山隊総隊長 錦織英夫参加
- 1976年 カラコルム・スキャンカンリ峰 (7544m) 初登頂
- 1981年 ヒマラヤ・ヒマルチュリ峰 (7893m) 南稜敗退
- 1990年 チベット・チョ・オユール峰 (8125m) 登頂
- 1994年 ヒマラヤ・ドルジェラクバ峰 (6966m) 登頂
- 1998年 棚橋 靖・ナンガパルバット峰 (8125m) 単独登頂
- 1999年 中国・レッドメイン (6112m) 初登頂
- 2014年 インドヒマラヤ・ギャルモカンリ (6070m) 初登頂
5. 1955年以降の遭難に関する展示
- 1955年12月 鹿島槍天狗尾根
鈴木迪明 鈴木弘二 藤原荘一 清水善之
- 1971年3月 劔岳小窓 千木良滋夫
- 1981年7月 日高山脈キムクシュベツ沢 辻 訓見
- 1982年8月 白神山地赤石沢 緑川 博

- 2015年2月 八ヶ岳阿弥陀岳 吉田周平 土山莉里香
6. 日光光徳小屋の展示
歴代の小屋の写真の展示と小屋日誌の展示
7. 国内初登攀記録の展示
- 1958年 冬期八ツ峰完登
冬期小槍初登攀
- 1971年 飯豊山 実川本流 本カゴ沢左股 廻行
- 1978年 冬期劔岳八ツ峰 1峰東面4稜 冬期初登攀
冬期劔岳チンネ 上部筑豊ルート 冬期初登攀

学習院山岳部100周年記念の挨拶

学習院大学山岳部部长 荒川一郎 (理学部教授)

II. 講演

1. 桧垣陽三：「立山松尾峠の遭難・遺蹟碑の芦 峯寺」
2. 福岡孝純：「八方尾根の第三ケルン建立と学習院山岳部の活躍について」
日本スキーの発展に寄与した福岡孝行の功績。
映画「スキーの寵児」

III. 懇親会

開会の挨拶 学習院高等科山岳部部长 山本昭夫

祝辞 学習院院長 内藤政武

乾杯 日本山岳会会長 古野 淳

ヨーデル演奏 エンツィアン

合唱 学習院音楽部 OB 部歌「いざや登らん」
「山の仲間」

「遥かな友に」「学習院 院歌」

遭難者への黙禱に代えて、「遥かな友に」の合唱に合わせて遭難者の名前が壁面に映し出された。

お礼 学習院山桜会会長 藤大路美興

私の学習院山岳部

芳賀孝郎

私が学習院山岳部に入部したのは1954年であった。考えてみると山岳部とのお付き合いは65年に及ぶ。

私が入部した当時の山岳部は古い学習院山岳部の伝統が残っていた。汚い木造のルームは、自由な雰囲気に包まれていた。部員は各自好きな山登りを楽しんでいた。即ち冬山を目指す者、夏山のみを楽しむ者、岩登りに専念する者、山スキーを目指す者その他多数であった。個人的で豊かで自由に山登りを楽しんでいた。別の言い方をすると、まとまりのない勝手な山登り集団であった。

各部員は尊敬する先輩宅を訪問して先輩の話を聞き、酒をご馳走になり、議論して帰り、その部員は先輩から聞いた話を得意げにルームで報告するのであった。私は舟橋ラッキョさんのところへ仲間と共に時々出かけた。学習院山岳部の三つの訓えを教わり、1953年アンナプルナIV峰での凄まじい嵐の中での撤退の様子を聞き、興奮し、酒を酌み交わし、唄を歌いそして泊まり込み、新婚宅に迷惑をお掛けした。

山岳部のテント、ザイル、ザック、ピッケル、アイゼン、ラヂウス、スベア・ストーブ、鍋釜・食器、スキー、ストック、ワカン、ハンマー、ハーケン、マットその他の装備、備品は乃木希典院長の遺品置き場の隣に保管されていた。その中にはシュンク、フリッツマイヤー、ウィリシュ、ベント、カドタ等のピッケルとエッケンシュタイン、カドタのアイゼンがあった。さすが学習院山岳部と思った。しかし名品のピッケルとアイゼンは何時の間にか消えうせた。

学習院山岳部のOB会即ち山桜会はいつも霞会館（旧華族会館）で開催されていた。私が記憶している学習院山岳部の先輩たちは松方三郎、伊集院虎一、渡辺二郎、大久保寛一、鍋島英夫、加藤泰安、福岡孝行、木戸孝澄、土田新一、周布光兼、原口兼義、鍋島直玄、榊 愛彦、田敏夫、舟橋明賢、三井源蔵、今園國建、本間康正、佐久間宏、犬養康彦、顔 恵民だが、その他多くの方々が出席していた。

先輩たちは個性的な人たちで、戦前の学習院のエリートたちであった。戦後に学習院は学校法人となり、広く一般社会の人たちも入学可能になった。私もその一人である。

当時山桜会会長は松方三郎であった。新入部員が入るといつも歓迎の言葉があり、「今年も紳士の卵が入部してくれた。嬉しく感謝する」と言って迎えてくれた。英国では登山は紳士のスポーツであり、社会的に高く評価されていること。その所以は、山に対して自己責任、自己申告の Be fair、その精神は Be calm、Be patient, Don't panic と教えられた。「山登りは、大きな自然、即ち山を相手に立ち向かうスポーツなので、ちょっとでも自分に対して自分を実際よりよく見せたい‘てらい’の入った時は、命に関わる遭難が直ちに出てくる。征服すべきは自分である。山ではない」といつも聞かされていた。

私は1年生の春山（1955年3月）登山は、劔岳から槍ヶ岳への縦走のサポート隊であった。私たち1年部員4名は弥陀ヶ原に入り、立山から五色ヶ原までサポートし、4人の仲間は縦走に成功した。部は活況を呈して部員は20名以上になった。来るべき春山は南アルプス全山縦走と決まった。

その年の12月冬山として鹿島槍の天狗尾根と東尾根からの登山が行われた。私はその年の登山の費用はアルバイトをして自分で稼ぐように親から云われ、鹿島槍には参加しなかった。私は正月、大町で本隊と合流して八方尾根のスキー合宿に参加する予定であった。

12月31日天狗尾根隊の4人の遭難の知らせを受け、舟橋先輩と共に現地へ向かった。そのあとに加藤泰安先輩が捜索にやって来た。当時加藤先輩は1955年のカラコルム・ヒンズークン探検隊に参加予定であった。しかしパスポートの関係で参加出来ず失業中であった。今まで現役部員を相手にしなかった加藤先輩が陣頭指揮を執った。

雪崩の捜索は天候悪化のため1週間で打ち切られた。捜索にはマナスル登山出発前の今西

寿雄、京大の脇坂 誠、平井一正、曾根原愿夫、同志社の平林克敏の各氏に協力していただいた。その後も加藤先輩の指導で、3月、4月、5月と捜索が続いた。

6月に1名が発見された。7月に2名、8月に最後の1名が発見されて、長い捜索は終了した。その間先輩から登山の指導をうけた。W. S. ヤングの「登山のために」を繰り返し読むように云われ、登山に関する精神的技術的な多くの指導を受けた。

この遭難を通して旧学習院と新制学習院との融合を図ることが出来た。山岳部は加藤・舟橋両先輩の指導と協力で休部させられることもなく通常の登山活動が出来た。

遭難後の1957年正月、遠見尾根から五竜・鹿島槍登頂、3月は横尾尾根より槍・西穂更に前穂・明神、滝谷二尾根、北穂北壁登攀に成功した。

加藤先輩に春山の報告をすると、新人を連れて穂高の雪の稜線を踏破したことを初めて評価してくれた。この記録は、加藤先輩が槍・西穂の冬期初縦走から25年目であった。

私には藤井と右川の二人の仲間がいた。いつも協力してくれた。そのお蔭で学習院山岳部は見事に復活した。私は更なる高き山を目指して、劔岳の早月尾根、赤谷尾根、小窓尾根から集中登山し、源次郎尾根、八ツ峰登攀を計画していた。その為に部員強化を図ることに努めた。その成果は1958年12月の北鎌尾根千丈沢側壁登攀、小槍の初登攀、1959年3月の北鎌尾根から西穂高への縦走へと続いた。

私は加藤家に自由に出入りすることが認められた。先輩が日本山岳会へ行くとき、また銀座で小説家の井上靖との対談の時など小姓のように私はお供した。そこで山岳会の多くの先輩を紹介していただいた。銀座のバーでの大人の会話も知った。11月小窓尾根の偵察から帰ると加藤先輩に呼ばれた。突然「お前はヒマラヤに行く気はあるか？」と聞かれた。その時の感動は今でも忘れない。

先輩が私をヒマラヤへ選んだのは、落ち込んだ山岳部に夢と希望を与えることがあったように思った。その時加藤先輩の後輩で内蒙古、小興安嶺探検に参加した周布光謙先輩は大変喜ん

でくれたことが忘れられない。

チョゴリザ隊員に選考されて、時々京都に出かけた。顔合わせと準備などで楽友会館には時々泊り、あとは岩坪五郎さん宅、高村泰雄さん下宿によくお世話になった。

私が計画した劔岳登山はチョゴリザ遠征で私は不参加となった。右川と田中のリーダーのもとで計画通りに成功したことを聞いてチョゴリザに出発した。

桑原武夫隊長と素晴らしい仲間とのチョゴリザ遠征と登山は、私の人生で最高の経験であった。今尚チョゴリザの仲間との友情が続いている。

1970年の日本山岳会エベレスト登山計画があった。加藤先輩が隊長候補になっていた。その時私の父が亡くなりその計画に協力できなかったことは今でも悔やんでいる。

私は松方三郎、加藤泰安、周布光謙、舟橋明賢らの諸先輩から特別の指導を受けることができた。偶然にも先輩は全て学習院から京都大学で学んだ人たちであった。

今回の学習院山岳部100周年記念祝賀会に平井一正、曾根原愿夫、横山宏太郎の3名に出席していただき感謝している。

1970年以降、私は札幌へ移住したので山岳部と遠ざかってしまった。その間山岳部は変わり、指導は一般大学と同じように監督制になった。私は現役部員、後輩、先輩との繋がりがなくなり淋しい気持ちである。しかし過去には現役部員が知床連山や日高の山に来た時に我が家に長く滞在したことや100名山を目指す中高年の後輩が我が家をベースに滞在してくれたことも良い思い出である。

今は私も老人になり、ストーブの赤い炎を見ながら山の唄を歌い、亡くなった多くの仲間、大場、藤井、川崎、高野らを思い出しているこの頃である。

これからも京都大学山岳部と学習院山岳部とは、交流を深め、また長く続けてもらいたいと願っている。

学習院輔仁会山岳部と私 — 同創立 100 周年記念に出席して —

平井一正

2019 年 11 月 30 日に表記の記念会が東京目白の学習院創立百周年記念会館で催された。都内の大学山岳部 OB はもとより、全国の大学の山岳部関係者が集まり盛大であった。会場には GAC の歴史を飾る写真パネルなどが展示しており、興味あるものであった。

AACK、あるいは京都大学山岳部関係者としては、横山宏太郎、曾根原愿夫、そして私が参加した。詳細は芳賀が書くと思うので、私は私と学習院山岳部（以下 GAC と書く）の関係を述べよう（以下敬称略）。

それは 1955 年の冬の鹿島槍にさかのぼる。脇坂、平井、岩坪、荻野、吉場のパーティで、黒部の十字峽をこえて剣岳まで縦走しようという計画であった。12 月 28 日に冷小屋を出発し、南槍の頂上へ着いたのはお昼頃であった。途中岩坪が荷物を黒部川側に落とすという事件でおくれたが、これが後で考えると幸運であった。牛首尾根を下降する途中で天候が急変し、急遽頂上まで引き返し、我々は 3 日間、風雪とガスが渦巻く頂上で、テントをかぶって嵐に耐えた。そして悪天の合間を縫って無事に脱出に成功した。しかし鹿島部落で GAC の遭難をきいた。凍傷で弱っていた 2 回生 3 人を大町まで送り、脇坂と私のふたりで GAC の捜索隊に合流した。遭難の状況は、天狗尾根のテントから食糧をデポに取りに行った 4 人が帰ってこない、とのことである。

旧制学習院高校から京大にきた人たちの中には松方三郎、加藤泰安など、多くの先輩がいる。見過ごすわけにはいかない。それから 10 日間余、駆け付けた加藤泰安、舟橋明賢とともに、

GAC 山岳部の若い人たちと一緒に捜索したが、結局見つからなかった。馬狩沢で遺体が見つかったのは 6 月以降であった。私はこの遭難捜索隊に参加したことで、多くの GAC の若者と知りあいになった。後にチョゴリザ隊員となる芳賀孝郎ともこのときの縁である。

次の縁は 1958 年、チョゴリザ隊に学習院から加わった芳賀孝郎との交流である。当時は社会は貧しく、若者はすべて 3 隻の貨物船に分乗してカラチに行った。私は芳賀とふたりで約 1 か月の船、さらにカラチからは炎暑の中、ラワルピンディまで 40 時間の汽車、というようにチョゴリザ隊員の中では、登山以外で芳賀と一番苦労した仲である。

次は 1976 年、GAC はスキャンカンリ (7544m)、私は神戸大学遠征隊の隊長としてシェルピカンリ (7380m) を目指し、カラコルムで苦労を共にした。両隊はそれぞれに初登頂という目的を果たし、そのときの GAC の隊員とはいまでも親交を結んでいる。

このほか日光にある GAC の光徳小屋を拠点とする登山や北海道十勝岳登山など多くの交流がある。

このように私と GAC との交流は長く、長年の交流を通じて、大学の枠を越えてお互い友好関係を続けてきた。他大学の山岳部と知り合うことは、お互いの長所、短所を知ることができて、多くの得るものがある。今回の 100 周年記念会では多くの旧友と会い、旧交を温めた。この関係は今後とも続けて行きたいものである。

学習院輔仁会山岳部 (GAC) 創立 100 周年に参加して

横山宏太郎

表記の会の案内をいただき、出席した。これまで学習院の方々とは特に登山を通じてのお付き合いなどはないのだが、山桜会（学習院山岳

部 OB 会）の重鎮にして AACK 会員の芳賀孝郎さんには、Newsletter の記事を書いていたいたりしてなにかとお世話になっているの



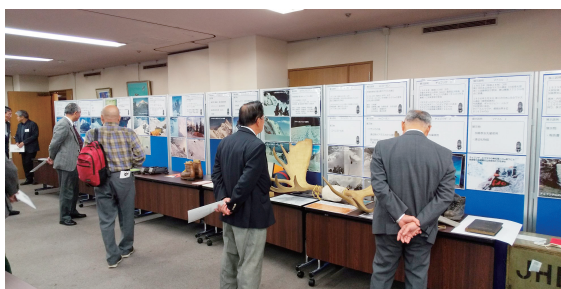
当日の会場にて、右から芳賀孝郎さんと淳子さん、登高会の中西 洪さん、吉川正幸さん、日野正紀さんと平井一正さん



宮様方の登山の写真展示



絹のザイル



海外登山関係の展示

で、そのご縁で案内をいただいたのだろう。

「目白の学習院」というのは知っていたが、キャンパスを訪れるのは初めてである。なるほど、JR 目白駅を出るとすぐに門（西門）が見える。そこから入って外の道路を左の塀越しに見ながら歩くと、会場の学習院創立百周年記念会館に着いた。

すこし早めの到着を心がけたつもりだが、すでにおおぜいの方々が、受け付けを済ませて談笑されていた。面識のある方にあいさつなどしていると、平井一正さんから、カナダ・アルバータ峰登山（1925年）で使われた絹のザイルがある、見ておくとよい、といわれ、そうだ、それを見逃してはならない、と展示会場に向かう。

ガラスケースの中に、絹のザイルはあった。およそ100年の時を経て黄ばんではいるが、なお美しい姿であった。学習院といえば、皇族方との結びつきが頭に浮かぶ。「皇族登山に関するコーナー」には、100年以上前からの写真が並んでいた。宮様方が槍ヶ岳、剣岳などの北アルプスの高峰に、そのころから登山されていたことには驚くほかない。海外登山では、各遠征隊の概要や使用装備が展示されていた。また、資料として「部誌」と書かれたノートが、古いものから最近のものまで並べられていた。いずれも、100年の重みを感じさせるに十分な品々であった。

式典として荒川一郎山岳部部長のあいさつに続いて、2題の講演があった。桧垣陽三氏の立山松尾峠の遭難に関するお話は大変興味を持っていたのだが、マイクの具合か、聞き取りにくく残念であった。次の演者の福岡孝純氏は、スキーの世界では有名な福岡孝行氏のご子息であり、孝行氏によるスキー映画撮影など、日本のスキー発展の歴史を生き生きと語られた。

懇親会では大勢の参加者で会場が埋め尽くされたといってもよい状況で、移動もままならないほどであった。それでも、旧知の日本山岳会関係者や北海道大学山岳部のOBたちを交えての歓談には時のたつのを忘れて楽しんだ。会場では、学習院音楽部のOBからなる合唱団が山の歌を歌い場を盛り上げた。

GACでも残念ながら遭難で亡くなられた方がある。このような会では、普通なら黙祷を捧げるところだが、この会では、その代わりに、「しずかなよふけにいつもいつも…」と始まる「遙

かな友に」が歌われているあいだに、お名前が壁面をスクリーンとして映し出された。GACでは部員同士のまとまりが強く、あいだは家族のような近さなのかもしれない、とおもった。

戦前の学習院から京大に進学された先輩方から始まった友好関係がこれからも続くことを願って、会場を後にした。

高村泰雄さんの逝去を悼む

酒井敏明

元会長高村泰雄さんが昨年6月4日に逝去しました。享年84歳でした。長い年月したしくおつきあいした友人の一人として、ここに彼の人となりを紹介し、登山者としてまた教育者研究者として生きた生涯をもふりかえっておきたいと思います。この時期に発表するのは遅きに失したうらみがありますこと、お詫びします。

高村さんは1934年9月1日生まれ、大阪市内で和装品を扱う商家の6人兄弟の3男でした。大阪府立高津高校を卒業して1953年京都大学に入学、山岳部に入部しました。以下では敬称を略して書くことをお許しください。

京大山岳部において山歩きを楽しむ

高村は高校時代から成績優秀で知られていたのですが、勉学の傍ら1年生から山岳部に所属して山登りとスキーに親しみ、京大山岳部でも早くから頭角をあらわしました。北山の金毘羅岩の新人歓迎山行で岩登り訓練中に滑落事故が発生し、2回生部員1人の犠牲者が出ました。7月に穂高岳涸沢でおこなわれた夏山合宿は長雨にたたられて計画のほとんどが未消化のまま終わりました。10人ほどいた同じ年の新入生たちには気の毒なシーズンでした。笹ヶ峰ヒュッテでおこなわれた冬のスキー合宿には1回生としては高村ただ一人が参加したのですが、合宿生活を楽しみ、山スキーの実力は先輩たちの目をみはらせるほどだったようです。山岳部員としての4年間、部活動に積極的に参加し、誠実で責任感が強く、一方で控えめで仲間を立てる風があり、人気者でありました。夏の剣岳真砂沢と穂高岳涸沢の合宿はもちろん、積雪期には白馬岳杓子尾根、鹿島槍天狗尾根と東尾根、毛勝山・剣岳極地法登山、槍ヶ岳・穂高合宿など、部の主な山行には必ず参加していました。

他方、夏と秋には北海道日高山地、南アルプスの塩見岳・光岳縦走、八ヶ岳などにおいて小

人数の牧歌的ないし放浪的志向をおびたというべき山歩きもあったようです。

春夏秋冬それぞれの季節に山は高村を迎え入れ、高村はそれを好み、それに従って山に入ったのだということでしょうか。3回生の11月から1年間高村は部のチーフリーダーの重責を担い、当時50人余を数えた大所帯であった山岳部を支える大黒柱であったということが出来ます。

彼は最初の冬山（笹ヶ峰スキー合宿）に参加したとき、上級生たちからめでたくもデルファというあだ名を進呈されます、これが使い勝手が絶妙によく、本人もこれを憎からず思っている風があったので、先輩はもとより同期の仲間たちもデルファと呼び、後輩はデルファさんを使い、部員の多くが本名を忘れてしまったほどでした。歴代のルーム日誌には、山行の計画やその結果と反省、定例水曜会の議事、部員が執筆した論文やアート作品など多種多様の書き込みが残され、山岳部の大事な宝物になっていますが、これに高村はつねにデルファと自署しています。

海外登山に活躍

彼が入部した1953年にエヴェレストが初登頂され、日本山岳会の遠征登山隊で隊員今西壽雄がガルツェンとともにマナスルに初登頂したのは彼が4回生のときです。

AACKは1953年ポストモンスーン季のアンナプルナIV峰登攀を退けられた後、58年にカラコルムの未踏峰チョゴリザに遠征登山隊（桑原武夫隊長）を派遣しましたが、このとき大学院生であった高村は最年少でしたが隊員に選ばれ、存分の活躍をして大いに気を吐きました。8月4日藤平正夫、平井一正の二人が初めて頂上（7654m）に到達、日本隊のカラコルム高峰登攀の先駆けになりました。

このあとの目標になったサルトロ・カンリは

パキスタン・中国の国境近くに位置し、登山許可証を取得するのに相当の努力と時間とを要したのですが、大学院博士課程〈農学〉院生であった高村は現地滞在の交渉役に任ぜられ、半年の精励奮闘の末許可を得ることができました。1962年日本パキスタン合同登山隊（四手井綱彦隊長）に彼はまたしても隊員に選ばれました。本人はチョゴリザ恩返しのこともあり許可取得交渉に没頭し、あとは学業に専念することを予期していたのです。この山は5500mの雪の峠ピラフォンド・ラを越えピーク36氷河をのぼる大迂回ルートを強られるアプローチ長大の登山でした。高村は斎藤惇生、バシールと3人の登頂隊の一員として、見事7742mの頂上到達を果たしました。それも最終キャンプを出発してから頂上までの高度差750mの登高に1泊半を要した、異例の長時間におよんだ雪との格闘の末に勝ち取った登頂成功でした。

許可が交付されるか見通しがつかず手詰まりを感じて焦っていたときです。訪バ計画が伝えられた池田勇人首相が京大出身であることをヒントに高村は古内広雄大使にご相談し、首相に合同登山計画への支援を願い出る方策を思いつき、これが功を奏して首相がアユブ・カーン大統領と会談した場でサルトロ・カンリを正式に許可することが発表されたのです。高村のねばりと熱意が交渉の場面で成果を上げたわけで、彼の優れた資質を示す結果になりました。

作物研究の幅と深さ

二度の海外遠征に参加した後、高村は大学院生の生活にもどります。最初はイネが研究、実験の対象でした。フィリピンのマニラ南郊にあった国際稲作研究所に研究員として1年半勤務、1966年3月に帰国して大学院を退学します。同年4月農学部助手に任ぜられ、学生院生の教育を担当することになります。同年11月川崎佳子さんと結婚しました。

高村のこの助手時代のことですが、のちに大学紛争と呼ばれる学生たちの大学当局に対する闘争が日大や東大などではじまりました。1969年夏、京大農学部ではA闘（農学部闘争委員会）が主導する学生たちが建物をバリケード封鎖し、教授会と対立して無期限ストライキに入ります。学生たちの主張に共感する若手の助手たち有志が退去命令に従わず、結果として

10人の助手が警察の機動隊に逮捕される事件になりました。彼もその一人として留置所泊まりを経験し、処分保留で3日目に釈放されます。持ち前の誠実さと熱心さをもって学生指導にあたり、学生たちの信頼と尊敬を集めていた若き助手高村のエピソードの一つです。

学生の教育を担当する一方で自身の研究を進めていた高村は1975年4月和歌山県潮岬大島にあった農学部付属亜熱帯植物実験所に助教授として勤務することになります。その後、80年に文部省の教科書調査官に任ぜられ、東京暮らしが始まりましたが、これは3年で終了。1983年4月には岡山大学農学部へ転勤を命ぜられました。なぜか彼は勤務先がたびたび変わりましたが、家族はいっしょに暮らすべきであるとの考えから、住居もそのたびに変わったのです。その間に長女と長男、二人のお子さんが生まれ育っていきますが、姉弟の教育を考えるとまったく歓迎できない環境の変化が続きました。

東京の3年間を除き、高村は教育研究生生活の間中に中米南米の国々特にメキシコ、ペルー、ボリビアなど、東南アジアではインドネシア、ミャンマーなどに、作物学の実地調査の旅を繰り返しておこないます。いつのまにかイネに加えて、その地固有の熱帯的、亜熱帯的作物への関心が芽生え、無視することができなくなるのだらうと、私は想像します。作物研究の視野が広がり、新たな研究領域を見出したように思われます。ジャガイモ、トウモロコシ、キャッサバ、サゴヤシなど、次から次へと気になる作物が増え、研究意欲が刺激されたのでしょうか。

1986年4月高村教授は京大に転勤になりました。98年3月に定年退職するまでの12年間、アフリカ地域研究センターをメインとする京大の三つの学部で教育・研究に従事しますが、この時期はおもに熱帯アフリカが彼の研究対象でありました。

京大のアフリカ研究の先駆者は今西錦司、伊谷純一郎などのグループであり、その後何人もの本会会員が先輩たちのあとを追っていろんな方面で活躍し、多くの業績を上げていることは周知のところだと思いますが、遅ればせながら高村もここに参入することになりました。彼は作物栽培におけるアフリカ的特色に着目し、これを農業生態学的に分析することに進むべき方向を見出したのではないかと、これがど素人の私の

想像するところなのですが、自信は勿論ありません。高村の誠実でかつ万般を見渡す洞察力が国際協力の場面で大きな貢献をするに違いないと思っています。

身体の不調に悩まされる

彼はここ数年身体に不調を覚えていました。先輩である斎藤惇生ドクターにはしばしば相談をし、助言を受け、相応の養生に注意を払っていたようですが、友人たちには細かく説明することはほとんどありませんでした。飲酒については早熟で、高校生のときすでに友人たちと酒を飲む機会があったようで、京大山岳部ではデルファは酒好きで知られていました。若い時には酒をめぐる武勇伝もしばしば語られました。そんな高村でしたからこのところ酒量が減っていることには気づいていましたが、彼はいつでも元気に振舞っていましたので病状の深刻さを私などは全く知ることはなかったのです。

現役学生の一時期同じ下宿屋に住んだこともあり、サルトロ・カンリではいっしょに頂上に立った斎藤惇生、ワイ先輩が、本文末尾に書名を上げて紹介する冊子に投稿された追悼文の中から、高村の病状を説明された箇所を選んで以下に引用します。

2019年6月4日、午前10時53分、伏見の国立療養センターの緩和ケア病棟に入院していた高村デルファが安らかに息を引きとった。前日まで夫人や看護師に発声困難のため筆談を混ぜて談笑し、夫人によると日記も書いていたようだ。全くの静かな大往生であった。

高村は2015年10月から16年1月にかけて肝嚢胞の摘出手術を受け3回入院した。16年9月には大腸の肝湾曲部とS字結腸の2個所の癌が診断され入院、右半結腸とS字結腸の切除を受けた。術後は経過良く順調に回復した。しかし約1年後の17年10月肝臓に5cm大の転移が見つかり摘出手術を受けた。早すぎる転移に心配したが主治医からの報告では転移癌は切除でき、周囲のリンパ腺への転移は無かったとのことだったので少し安心した。だが半年後の18年5月には右鎖骨窩、9月には胸部中央の縦隔、肺、腹腔に転移が認められた。抗癌剤治療は高村の拒



ケア病棟に入院した高村を友人たちが見舞う
右端は佳子夫人

否意志があり、施行されなかった。このことについて高村から相談を受けたが、強い副作用と最終の効果が期待できないことを知っているの、彼の意見に同意した。

今年の2月ごろより高村は声のかすれが強くなってきた。胸部の上部から咽喉頭へと逆上走して声帯の運動を支配する反回神経が、癌が転移したリンパ腺に圧迫されたため、癌勢の進行を示していた。

3月20日夜高村は斎藤診療所に来た。まだ詳しくは説明を受けてなかったようで、反回神経の圧迫による声帯の運動不全を説明したら納得した顔だった。しかしそれ以上のことは何も云えなかった。その後嚥下困難が加わりむせるようになった。

私は彼は今年の夏を越せないのではないかと感じた。それで5月22日、平井、酒井、左右田、岩坪と一緒に療養センターに見舞に行った。話好きの高村は意のままに声が出ないので、手持ちのボードに筆談をまぜてみないろいろな思い出を語り合った。朗らかで楽しそうな顔だった。結局これが最後の別れになってしまった。せめて7月24日のサルトロ・カンリ登頂日を一緒に乾杯できればと思っていたのだが、少し早く逝ってしまった。
(以上斎藤記)

6月6日京阪電車深草駅近くのセレマ稲荷シティホールでお通夜、7日告別式が営まれました。宗教色が少しもない、音楽葬でした。故人があらかじめ奥様やお子様たちと相談していた

ものらしく、いかにもデルファにふさわしい、あかるい好感の持てる集いでした。祭壇にはたくさんのお花と遺影写真、友人たちと教室・研究室関係の人たちからの供花が盛大に飾られ、司式と電子オルガン奏者、百人を越える参列者の全員が作り上げたお通夜ということもできるでしょう。次の日同じ会場でおこなわれた告別式では、オルガン演奏の中ご遺族をはじめ参列者全員が次々に捧げ投入する花々に埋められたお棺を目送しました。簡素でしかし厳粛な葬送の儀式でありました。

敬愛する登山者 学究の徒

デルファ 高村泰雄の霊よ

とこしえに安らかならんことを祈ります
合掌

後記の3人が有志に呼び掛けて追悼文の寄稿を募り、かつ資金援助をも求めて編集刊行した『山・作物研究・アフリカ——追悼 高村泰雄』（体裁 A5 判 写真 12 頁 本文 153 頁）が若干部数残っています。これは希望する方に送料込み 1 部 3000 円で頒布させていただきます。早い目下記あてお申し込みくださるようお願いいたします。

編集刊行委員会

平井一正 酒井敏明 岩坪五郎

振込先：ゆうちょ銀行

店名四四八 店番 448

普通預金 3426919

イワツボゴロウ

図書紹介

『ブッシュマンの民話』

田中二郎著

京都大学学術出版会、2020年1月発行 288ページ

ISBN: 9784814002498 定価 2800円+税

伊藤寿男



著者は山岳部時代に苦楽を共にした同期の田中二郎（以下呼び慣れた「ジロー」とする）。

彼は2年半前に、自身の学術研究の集大成として774ページの大書『アフリカ文化探検』（本文末の注記ご参照）を出したばかりであるが、まだ筆も乾かないうちに本書を書き上げた。

題名から推察して上記『アフリカ文化探検』編集の片手間に気軽に書いたのだろうと手に取って見たら、なんとジローがカラハリ砂漠で調査していた1980年代頃から、文字を持たずいずれ消滅してしまうかもしれないブッシュマンの民話を文字情報として残しておきたいとテープで収集してきたものがベースになっていることが分かった。ジローの先見能力とブッシュマンへの思い入れが込められた学術的にも意義のある本である。

ちなみにジローは永年にわたるブッシュマンの調査・研究の功績により2015年9月ウイーンで開催された国際狩猟採集民族学会に於いて生涯功績賞を受賞する栄誉を得ている。

といって堅苦しい読み難い本ではない。

我々の知っている日本の民話は、おおらかで親しみを感じるものであるが、狩猟採集民であるブッシュマンのそれは日本と異なり、大自然の中で彼らの身の回りにいる動植物が主人公

で、時に変身、だましまされ、殺し殺され、あっけらかんとしたセックスや下ネタ話なども登場し、天衣無縫、奇想天外、我々日本人の埒外の世界が展開される。

世界各国の民話にはたいい悪戯好きな創造主が登場するが、ブッシュマンの民話では「ピーシツォワゴ」がそれである。太陽と月の2人の妻を持ち、人間の姿をしているが、時には動物や植物の姿に変身して獲物をかすめ取ったりしている。毒蛇に急所を噛付かれのたうち回るカミサマなど人間味があって面白い。

行間も大きく、文章も柔らかく、さらりと読むことが出来る。しかし、テープ起こしの際、ジローは臨場感を出すため故意にそうしたのであろうが、ときに同文の繰り返しや、文脈の乱れ、尻切れトンボの文章、など散見され、拘り出したらキリがないので、民話（ストーリー）ごとに直に読み切ること。そうすると各ストーリーの最後にジローの「解説」欄が設けられていて、ストーリー中の疑問点、ブッシュマンの生活実態、珍しい動植物の写真入りの紹介など、ちゃんとフォローしてくれる。この各ストーリーごとの「解説」欄が本書の目玉といえよう。

この本の体裁も素晴らしい。カバーや表紙は民話ティックな色合いと挿絵、文中の珍しい写真の数々、全ページの上下にしゃれた絵柄模様があしらわれ、如何にも民話の本らしく、眺めているだけでも楽しい。カタカナの現地語が沢山出てくるが、巻末に索引があり便利である。

本書の民話（ストーリー）のいくつかには、学者のジローらしくQRコードを付けていて、

ブッシュマンの語りの音声を聞くことが出来る。特に彼ら独特のクリック音（舌うちのような子音）言語が聞けるのはQRコードあってのもの。

本書は児童向けの民話本ではない。むしろ自然大好き、未知未踏の地大好き、現地の人達との交流大好きといった、我々向けの本ではなからうか。

大自然の中に容易に溶け込むことが出来る感性をお持ちの諸兄、この本を読んで、暫しブッシュマン、いや時空を超えて遙かにしえの原初のブッシュマン世界に溶け込んで、ピーシツォワゴとともにカラハリ砂漠を駆け巡っては如何。

(注)

『アフリカ文化探検—半世紀の歴史から未来へ—』山極寿一京都大学総長推薦
田中二郎著（京都大学学術出版会）
定価（3,600円＋税）

2017年7月出版。774ページの大書。カラー写真450枚余をふんだんにあしらった大部のものであるにも拘らず、山極総長裁量経費の支援を受けて3600円＋税という買いやすい価格で出版されている。アフリカの各所を半世紀にわたって広く探査し、調査研究した経緯を一般向けに平易に記述したものであるが、30回に及ぶアフリカ行きの通算100カ月中の80カ月はカラハリ砂漠のブッシュマン調査に費やしており、したがって内容もカラハリ砂漠で狩猟採集生活を営むブッシュマンの生活、社会、文化を人類学的に解説した部分が大きな比重を占めている。

記録的暖冬の2019-2020冬

横山宏太郎

すでに報道などでも皆さんご承知のことでしょうが、この冬は記録的な暖冬、少雪です。

冬を通して、ときどきまとまった降雪はあったが、降雪量は平年に比べてかなり少なく、積雪深もずっと少ないままでした。その第一の原因は、偏西風の流れが日本付近で北へ蛇行するパターンになり、日本付近への強い寒気の流入がほとんどなかったため、といえるでしょ

う。気象庁ウェブサイト「冬（12～2月）の天候」として解説が掲載されました。

筆者の住む高田（新潟県上越市）は、「雪の高田」ともいわれ、江戸時代のこと、加賀藩の飛脚が通りかかったが家々は雪に埋もれて見えず、「この下に高田あり」と記した高札が立っていた、という話が伝わっています。また気象観測が行われるようになってからでは、昭和

20 (1945) 年 2 月 26 日に観測された積雪深 377cm は、平地にある気象官署 (気象台・測候所など) の第一位の記録です。

その高田でもまさに記録的な暖冬少雪で、これまでの積雪深の最大値は 23cm と、平年値の 122cm の 19% でした。月平均気温は、1 月が 5.3℃ (平年 +2.9℃)、2 月が 4.7℃ (平年 +2.3℃) とずいぶん高めでした。降水量は 1 月と 2 月の合計で 692.5mm と、平年の約 102% ですから平年とほぼ同じです。しかし 1 月と 2 月の降雪深 (新たに積もった雪の深さの累計) の合計を見ると 63cm で、平年値 440cm の 14% にすぎません。つまり平年と同じくらいの降水はあったが、気温が高いので雪として降る量が少なくなり、雨として多く降った、というわけで、文字通りの暖冬・少雪でした。

これよりさらに積雪深が小さかったのは、1989 年の 15cm です。この年は気温は 1 月、2 月とも 2020 年よりも 0.6℃ 低いのですが、降水量が平年の 73% と少なめでした。

このように雪が少ないと、生活する上では除雪の苦労や出費もなく、交通への影響もほとんどなく、たいへん助かります。除雪にからむ事故もあまり起こりません。しかし困ることもいろいろあります。NHK ニュースによると、2019 年 12 月と 2020 年 1 月の新潟県内のスキー場利用客は、前年に比べて 34% 減だったそうです。新潟県内各地で予定された雪まつりなど冬のイベントには中止になったところも多いようです。道路除雪は、土木関係の会社にとっては冬場の大きな収入源ですが、出勤回数が少ないので多くは見込めません。このように、雪国の経済には大きな影響があります。

水資源についても心配する報道がありました。本州日本海側の気候では、冬に降水量が多くなります。降水が雪として降れば、いったん積雪として蓄えられ、雪解けとともに河川に流出してきます。その時期はちょうど水田で水がたくさん必要な時期と重なりますので、米どころ新潟には好都合です。しかしこの冬のように積雪の量が少ない場合は、もし春に好天が続いて降水量が少なめであれば、水不足になる可能性もあるわけです。

かつては、「平地の雪が少なくても、山地の雪の量は安定しているので心配ない」と言われていました。しかし、筆者が約 20 年にわたり山地の積雪を調査した結果では、山地の雪の量もかなり年々の変動があり、標高 1000m 付近でも、調査した期間の最小の年は最大の年の 1/3 くらいになることが分かりました。これより低いところでは変動はさらに大きくなります。

この冬は、やはり山の雪も少なめのように、印象ですが、例年より山が黒っぽく見えています。ということは、藪が雪に埋まっていなくて、快適な山スキーは望めないのではないか、と思っています。当地では「平地は少なく、山地は充分、という雪の降り方が理想的」という声がよく聞かれます。この冬は残念ながら、それよりもずっと雪が少なくなってしまったようです。つぎの冬には、「理想的な雪」を願っています。

参考: 「冬 (12 ~ 2 月) の天候」 <http://www.jma.go.jp/jma/press/2003/02b/tenko201202.html>

注: 気象データは全て気象庁ウェブサイトによる

第 50 回雲南懇話会 講演概要

山岸久雄

第 50 回雲南懇話会は 2019 年 12 月 22 日 (日)、JICA 国際会議場 (東京・市ヶ谷) で開催され、91 名が参加しました。その講演概要を紹介します。

1. 「雲南中華世界の膨張、絶え間なく移住する人々

—石屏県とプーアル茶を巡る歴史の中で—

早稲田大学非常勤講師 西川和孝

西川氏は、中華世界の周辺部である雲南省南部、石屏県に入植した漢人の活動を通じ、彼らがどのように周辺地域に浸透し、中華世界を膨

張させていったかを、以下のように語った。

石屏県は雲南省から貴州省へ広がる高原の南縁部にあたり、その95%は山地で占められ、残る5%が石屏盆地となっている。ここは非漢人の住む土地であったが、明朝初期(14世紀)から漢人の入植が開始された。石屏盆地は西から東に向けゆるく傾斜しているため、盆地東側の出口には水が集中しやすく、たびたび洪水に見舞われた。石屏漢人は、初めに緩やかな傾斜地で耕地開発を行うが間もなく開発は頭打ちとなる。そこで官主導で大規模低湿地開発を実施し、同時に河川の浚渫、竜骨車による排水などの治水工事を進めた。そして、こうした過程で石屏漢人は高度な土木技術を身に付けていった。

また、石屏漢人は土地資源の効率化を狙い、綿や麻などの工芸作物の栽培や手工業を盛んに行い、豊かな経済力を背景として多くの知識人を輩出した。しかし、明末(17世紀初頭)には土地資源の開発は限界に近付き、石屏漢人は周辺地域への移住に活路を求めた。

有力な移住先となったのは、古くから六大茶山と呼ばれ、プーアル茶の栽培で名高い西双版纳(シーブソンバンナー)タイ族自治州の猛臘県であった。当時、茶栽培は地元の少数民族が担っており、栽培方法は原始的で、品質も安定していなかった。石屏から移住した漢人たちは石屏盆地で習得した工芸作物の栽培技術をプーアル茶の栽培に応用し、高品質の茶を安定に栽培することに成功し、現地社会で存在感を示すようになった。

そして栽培技術を武器に、地域住民(少数民族)と婚姻を結ぶなど関係性を深め、茶山の周辺地域に茶栽培を普及させていった。経済的に豊かになった漢人は高利貸を手掛けるようになり、地元民との摩擦が強まった。反乱が起き、清朝政府が鎮圧に乗り出し、漢人商人の営業を制限することもあったという。

(以下、山岸の感想)このような話を聞き、現在も膨張を続ける中華世界のルーツを見る思いがした。

参考:西川和孝著「雲南中華世界の膨張」
—プーアル茶と鉱山開発にみる移住戦略(慶友社、2015年)



講演会場の様子(岩脇康一氏 撮影)

2. 「七つの大陸の最高峰を訪ねて—山岳部復活を目指したドリーム計画—」

神奈川大学体育会山岳部総監督 落合正治

落合監督は、神奈川大学山岳部OB会の中心メンバーである。同山岳部OB会が、現役部員と一体となって山岳部を復活させていった経緯を次のように語った。

今から20数年前、神奈川大学山岳部の最後となる部員から歴代リーダーへ、「我々が卒業すると部員はゼロ。休部となり、数年後には廃部手続きとなる」との連絡が入った。歴代リーダー数名が集まり協議したが、解決の糸口は見つからず、諦めかけていた。そうした中、この事情を聞きつけた数名のOBから、山岳部復活を支援するため、OB会を再編すべしとの声が上がった。これに応え、同OB会は神奈川大学校友会に同期同好組織として登録し、再出発することになった。

しかし、山岳部復活への道は遠く不透明であった。最大の難関は、ロートルOBが「どうやって新入部員を確保するか」という点であったが、近隣大学山岳部員とOB会員子女の協力により3名の新入部員を確保することができた。OB会是指針として、新入部員に部活動を通じて楽しさと厳しさを体験してもらうとともに、現役部員とOB会員が大きな目標を共有することが重要と考え、夢実現計画ドリーム21~夢抱き、夢育み、夢実現~として、七大陸の最高峰制覇(いわゆるセブンサミッツ計画)を提唱した。

10代から70代の隊員で編成される遠征隊を組織し、人材や資金確保など多くの難問を乗り越え、2002年~2009年の7年間で、単独大学としては世界初のセブンサミッツ制覇を成し

遂げた。講演では七つの大陸の最高峰が、現役部員とOB会員のチームにより毎年、ひとつずつ登られてゆく経過がスライドで紹介された。

神奈川大学山岳部は現在、部員30名を数えるが、その内、登山（アルパインスタイル）を指向する部員は7名で、その他はクライミング、トレイルランを指向する部員である。同大学では早い時期から学内にクライミングウォールが設置され、毎年、これを使ったクライミングコンペが、日本山岳会青年部・学生部主導の下、全国から70名近い学生を集め実施されている。

部員減に悩む大学山岳部が多い中、なぜ神奈川大学山岳部はこれほど多くの学生を惹き付けることができるのか？という質問に対し、落合監督は、現在の多様化する登山の形態に対応した活動プログラムが用意されていること、学生が登山の魅力に気付き、目覚めることを支援していることを挙げた。

落合監督は同山岳部卒業後、アマゾン・オリノコ河踏査隊の隊員となり、同地を長期にわたり調査・探検した。このとき、現地の自然から多くを学び、目覚めたと語ったが、この経験が、同山岳部・OB会の高い目標設定、学生自身の覚醒をうながす指導のあり方に反映されていると感じた。神奈川大学山岳部・OB会は次なるプロジェクト：夢無限～G & G計画～（世界のGreat Summits 10峰、ヒマラヤGiants 14座を登頂する）の実現に向け、活動を続けていくとのことである。

3. 「スマトラ・カリマンタンの低湿地と地球環境問題—泥炭湿地をはいずりまわる—」

愛媛大学大学院農学研究科准教授 嶋村鉄也

最近、世界各地で大規模な森林火災が報道されている。嶋村氏の研究フィールドであるインドネシアの熱帯泥炭湿地林の火災もその一つであり、1997年の大規模火災ではインドネシア一国で0.8～2.6ギガトンの炭素が大気中に放出された。これは世界全体の年間化石燃料消費量の13～40%に相当するという（Page et al., Nature, 2002）。

熱帯低湿地の水が溜まりやすい場所では植物遺体の分解が抑えられ、泥炭層となって堆積する。その厚さは10mを超え、最厚部が20～30mに達するドーム状地形を形成する場合も

多い。一般的に、森林での樹木が占める空間密度は0.8%程度となっているが、泥炭湿地林では地下のほぼ100%が植物遺体で埋め尽くされるため、地下の炭素蓄積量は地上に比べ膨大になる。そのため泥炭層が火災を起こすと大量の炭酸ガスが排出され、地球環境に深刻な影響を及ぼすわけである。

野外調査フィールドとしての熱帯泥炭湿地林は、世界最悪の環境と言える。高温、多湿。ありとあらゆる毒虫と吸血動物。地盤は軟弱で、樹木根の無いところへ足を踏み出せば膝から股下まで潜ってしまう。嶋村氏は学生時代、熱帯での研究にあこがれ、アジアアフリカ地域研究研究科生態環境論研究室のドアを叩いた。教授は嶋村氏の風貌を一目見て、この過酷なフィールドに耐えられる人物と見込み、彼をそこに送り込むことにしたという。

現在、熱帯泥炭湿地林は、地球温暖化との関連から、その炭素蓄積量や収支動態への関心が高まり、多くの研究がなされるようになった。しかし、その生態系の研究は殆ど手つかずで、嶋村氏は学生時代以来、一貫してこの未開の研究分野に取り組んできた。その研究成果の一端として、泥炭湿地林の開花結実の時期が、雨期に伴う水位上昇や動物による捕食と深く関わっていること等を紹介した。

また、泥炭湿地林の開発に伴う環境問題についても語った。開発にあたり、森の樹木は皆伐され、湿地に排水路が掘られ、泥炭地は乾燥化する。農地に転換するため泥炭に火入れが行われる。しかし、農地として使い物にならない場合も多い。例えば1995年、政府が行った大規模水田開発では、100万ヘクタールの土地のうち、その大部分が、繰り返す火災によって放棄された。放棄された泥炭地はチガヤが繁る荒廃地となり、乾燥した泥炭は火災を起こしやすい危険な土地となる。

地球環境を守る観点からは、このような荒廃地の原状回復が望まれるが、地元住民は環境問題よりももっと差し迫った問題を抱えている。元の森林を回復させるには数十年の歳月を要すが、まずはこの期間、地元社会が安定に維持されることが先決である。また森林を管理するには、生物の営みについての基本的知見も必要になる。それゆえ泥炭湿地林を巡る環境問題は、温室効果ガスや炭素動態のみの問題ではなく、

生物・環境・人間社会の総合的な問題として捉えるべきである、と嶋村氏は強調する。

4. 「冬山登山の実像—黒部川横断、冬剣、冬薬師、そして海外の山々—」

明治大学体育会山岳部（前）監督、
炉辺会、日本山岳会副会長、
日本・ネパールカンチェンジュンガ登山隊
（JAC、1984年）隊員 山本宗彦

山本氏は明治大学山岳部を卒部した後、同部のコーチ、監督（2005～2017年）を長く務め、2019年より日本山岳会の副会長を務めている。同氏は多くの高度な海外登山（ボゴダII峰初登、レーニン峰・ Kommunizm 峰登頂、カンチェンジュンガ南峰（8250mまで）、主峰（8300mまで）、マッシャーブルム北西壁初登攀、ブロードピーク、ラカポシ東峰、チョモランマ東北東稜の登頂、マカルー東稜下部初登攀など）、冬期の剣岳、黒部横断登山などを重ね、60歳を迎えた現在でも重荷を背負い、若い仲間と冬の剣岳や、その周辺の登山を続けている。これらの山々の素晴らしいスライドとともに語った同氏の言葉は含蓄が深く、共感を呼ぶものであった。その一端を当日の配布資料を参考に、紹介したい。

- ・ 私は13歳の秋に、登山を自分の生活の軸にすることを決め、明治大学山岳部を目指すことにしました。そのためには明大附属高校に入るのが早道で、その入試に必要な3科目だけを中学で勉強し、入学することができました。
- ・ 私は13歳の秋に登った秩父御岳山を自分の登山の第1回目として記録を取り始め、2019年最後の山行が733回目となりました。その中で、私にとってはマッシャーブルム北西壁初登攀も秩父御岳山も同じ1回であり、同じように価値ある登山です。
- ・ 私にとっての登山は、自然の中に自ら分け入り、山に登る素朴な行為であり、ひたすら自身の価値観を具現化し続ける信仰のような行為です。いつのまにか、その信仰は47年ほどになりました。

- ・ 自分で考え、自分で決め、自分で実践することが登山の基本であり、自分で作ったルールを自分で守りながら登る行為は、自由ということの究極な表現であり、一つひとつの登山は、あたかも作品の様なものかもしれません。
 - ・ 既存のルートから外れた日本の冬山は「不安・不快・不便」が際立ちます（これに比べれば、ヒマラヤは快適です）。日本の雪山はヒマラヤと異なり、毎年、夏には雪が消え、冬には雪が積もる繰り返しで、毎年状態が変わり、一度でも同じ冬の剣岳に遭遇したことはありません。未知への遭遇があり、新しい発見があります。
 - ・ 私は冬の剣岳と大学山岳部の合宿で出会いました。五六豪雪※と呼ばれた年の冬に赤谷山から剣岳まで縦走したことが今の登山の原点の様に感じます。まだまだ未熟な大学3、4年生の山岳部員が、あの状況の中で計画を完遂して無事に下山できたことは、運に恵まれたことも否定できませんが、同時にそれを実現した思考と歴史は自分の血肉であり、私の登山の土台となっています。
 - ・ 「蘆山からヒマラヤへ、そして冬の剣岳へ」という私の登山は、現代のスマートでファッションな登山とは程遠く、地を這うようで泥臭いものです。同じことを繰り返す愚直な行為ですが、その行為を通じて、決してお金では買うことのできない、誰からも盗まれることのない宝物を得ることができたように感じ、山と登山という行為に感謝しています。
- その他、大切なこと、大事にしていることとして、「家族の理解」、「事故を起こさない」、「一緒に登る仲間がいること」を挙げ、雪崩などの事故を未然に防ぐために「雪の声を聴けるようでありたい」と語った言葉が印象的であった。

※ 五六豪雪：昭和55年12月から56年3月にかけて、東北地方から北近畿までを襲った記録的豪雪。この冬の降雪量は福井市で昭和38年の596cmを超え、622cmを記録。昭和61年の豪雪と並び、歴代1位である。

「第 51 回雲南懇話会」開催のご案内

— Yunnan Forum in Kyoto, May 2020 / 夢・好奇心・探求心 —

前田栄三

「第 51 回雲南懇話会」の開催について、下記のとおりご案内申し上げます。

「雲南懇話会」は、中国雲南省の最高峰・梅里雪山 (6740m) を中心とする「雲南・チベット地域」及びその周辺地域の総合的な研究を進める事を目的に 2004 年 12 月に発足、2020 年 1 月は 16 年めとなります。

この時に当たり、15 周年の記念すべき第 51 回雲南懇話会を京都で開催することと致しました。

2016 年 6 月以降、雲南懇話会は、京都大学ヒマラヤ研究ユニット & AACK 共催で行われています。

なお、今回は事前の参加申込みを必ずお願いします。定員になり次第、締め切らせていただきます。

記

1. 日 時：2020 年 5 月 10 日 (日) 9 時 45 分～17 時 30 分。茶話会；17 時 30 分～19 時 30 分。
2. 場 所：京都大学百周年時計台記念館、国際交流ホール 2 室 (茶話会は、懇話会会場に隣接する 1 室)
3. 懇話会の内容 <講師、演題、講演の順序など変更ある場合は、ご了承をお願い致します。>
 - (1)「雲南懇話会事始めから 15 年、今を語る」
雲南懇話会設立発起人を代表して、
AACK 松浦祥次郎
 - (2)「雲南懇話会の概況と 1989 年当時の梅里雪山山麓 (ス農村、明永村)」
雲南懇話会代表、筑波大学名誉教授
安仁屋政武
 - (3)「中国雲南省明永村の今」—語りと雲南チベット族の伝承歌、紹介—
雲南省明永村出身 ペマツォモ
岐阜大学応用生物科学部助教 田中 貴
 - (4)「雲南に未知のキンシコウを探す」
京都大学名誉教授、AACK 松沢哲郎
 - (5)「千日回峰行 山に溶け込むことから見えるもの」
北嶺大行満大阿闍梨、延暦寺支院
姨崎耶山伊崎寺住職 上原行照師

- (6)「西ネパールの辺境に魅せられて
—河口慧海師の足跡、フムラ・ドルポ越冬—
ネパール探求家、美容師 稲葉 香
- (7)「パミール・天山 7000m の峰々からヒマラヤの高峰へ」
登山家、高峰ガイド、Snow Leopard
Award 受賞者、8000m 峰 9 座登頂者
近藤和美

4. 懇話会参加費用：一人 2,000 円。但し、学生・院生は無料
茶話会参加費用：一人 2,000 円。
学生・院生は 500 円。
5. 参加申込先 (懇話会・茶話会とも必須)：
info*yunnan-k.jp (3 名の幹事に同時に通知されます。) (SPAM メール防止のため、@を伏せ字にしています。使用時、*を@に変換願います。)

【補足】京都開催の経緯：

1. 首都圏を中心に、東海・関東甲信越・そして東北・北海道に至る地域の皆さんと同様、京都・滋賀・大阪を中心に、中部・近畿・中国四国九州の皆様にも大変なご支援ご協力をいただけてきました。
15 周年を記念する機会に、西日本地域の皆様に「感謝」と「御礼」を申し上げるべく、京都開催と致しました。
2. これまでに講演いただいた西日本在住 (講演当時の皆さんは、以下のとおりです。(敬称略))
 - (1) AACK & 笹ヶ峰会員 (講演順、数字は延べ講演回数を示します。)：田中昌二郎、藤田耕史②、栗田靖之、内藤 望、福寫義宏、竹田晋也、中尾正義②、酒井敏明、安成哲三②、松林公蔵、田中 貴、吉村千春、吉野熙道、上田 豊、左右田健次、飯田 肇、松沢哲郎、奥宮清人、坂本龍太、高井正成、窪田順平、古川 彰
 - (2) 京都大学名誉教授・教授・准教授・院生他：山田 勇、安藤和雄、佐々木綾子 (院生)、渡邊裕之 (樹木医会)、伊藤詞子、水野一晴、渡辺弘之、大山修一、大西近江、富谷 至②、清水信吉 (企業 OB)、酒井治孝、湯本貴和

- (3) 他大学、研究機関：国立民族学博物館
 ②、名古屋大学②、宮崎大学、高野山大学、
 神戸大学、滋賀県立大学、総合地球環境学
 研究所、京都菌類研究所、橿原考古学研究所、
 (元)愛知大学、愛知県立大学、(前)名古屋
 市立大学、同志社大学(院生)、愛媛大学
 (4) 山岳会関係：東北大学山の会、神戸大
 学山岳会、京都大学山岳部、大阪市立大学
 山岳会④、関西学院大学山岳会③、同志社
 大学山岳部②

以上



献杯のご挨拶（関東昼食会、2019年8月2日）

(ご参考1) 講演いただいた東海、関東甲信越等東日本
 在住の AACK & 笹ヶ峰会員は、講演順に以下のとおり
 です(敬称略)。数字は講演回数を示します。安仁
 屋会員は自身の講演の他、講演の『総括』を47回
 実施しています。

松浦祥次郎②、小林尚礼⑬、並河 治②、本多勝一、
 安仁屋政武③、前田栄三⑤、栗本俊和②、前田浩之、
 幸島司郎、川久保忠通、門田 勤、横山宏太郎、安田
 隆彦、伊藤 一、山岸久雄③、河合明宣、伊藤寿男、
 芝田正樹、田中二郎、穂苅康治、遠藤 州、岩脇康一
 (ご参考2)



議事進行 & 懇談の様子（関東昼食会、2019年8月2日）

2019年8月2日(金)、雲南懇話会発足以来ご支
 援をいただいている関東在住の AACK 会員（懇話
 会設立発起人を含む）の皆さんにお集まりいただき、
 “懇話会活動概況、京都開催日 & 会場確定に至
 る経緯” “プログラムの概要” について報告し、雲
 南懇話会幹事団との間で意見交換を致しました。
 (写真は全て、岩脇康一氏撮影。)

当日の参加者、会場、議題等、以下の通りです。

- 日時・会場：2019年8月2日(金)13時～16時、於)
 京都大学東京オフィス会議室(新丸の内ビル10階)
- 参加者(全20名、敬称略)：並河 治、松浦
 祥次郎、曾根原惠夫、村上正康、塩瀬捷一
 郎、谷口 朗、福本昌弘、大竹三雄、田中健
 一、野村高史、上条雄吉【雲南懇話会幹事団】
 安仁屋政武、前田栄三、芝田正樹、山岸久雄、岩
 脇康一、宮坂 実、【監事】伊藤博明、【名誉監事】
 古瀬駿介



笹ヶ峰ヒュッテ管理運営状況報告
 (関東昼食会、2019年8月2日)

オブザーバー：笹ヶ峰会副会長、笹ヶ峰ヒュッ
 テ管理運営委員、古久保一徳永克男

3. 議題と要点

冒頭、並河ボケさんのご発声で、献杯。【ご逝去順に、
 饗場邦光、原 剛、高村奉樹、寺本 巖の皆さん】

- AACK 本部及び AACK 会員による多年に亘
 るご支援・ご協力に対する感謝と御礼、言上。
- 雲南懇話会活動の概況、報告(京都大学ヒ
 マラヤ研究ユニット長に提出した報告書に基づ
 き、説明。)
- 京都開催の経緯、プログラムの概要等、ご報
 告と意見交換

以下、折角の機会なので、笹ヶ峰ヒュッテの管
 理運営に関する話題を1件、“雲南省三江併流
 地域の大横断”の旅(カワカブ会主催)のスラ
 イド上映を1件、加えました。

- 笹ヶ峰ヒュッテの現状について

笹ヶ峰会副会長、
 笹ヶ峰ヒュッテ管理運営委員
 古久保一徳永克男

新しいヒュッテができてから今年で20年を迎えている。ヒュッテは設備面では概ね良い状態にあるが、山岳部員並びに若いOBの減少に伴い、管理運用に様々な問題が浮かび上がってきている。ヒュッテの現状について報告し、課題と対応について言及した。

(5) スライド上映、「梅里雪山と三江併流の大横断」
(2016年11月、カワカブ会の記録)

笹ヶ峰会 伊藤博明

(6) 近況紹介(参加者各人から近況など、紹介いただいた。)

食事(鰻弁当)を摂りながら、持込みいただいた多くの美酒・肴を味わい、和やかに懇談しました。

笹ヶ峰ヒュッテの管理運営に関連して、様々な声(叱声、懸念、期待と提言など)が寄せられました。以上です。



参加者の集合写真(関東昼食会、2019年8月2日)

新会長に幸島司郎さん

2020年2月11日に開催された理事会で、松沢哲郎氏より会長・理事辞任の申し出があり、承認されました。新会長には幸島司郎氏が選任されました。任期は2021年5月までです。

会員動向

訃報

大久保泰志 2020年2月26日逝去
清水 浩 2020年3月9日逝去

会員異動

田中 貴 自宅住所変更
山下 耕 自宅住所変更

編集後記

発行が遅れて申し訳ありません。次の締め切りが近いのですが、皆様ご寄稿よろしくお願いたします。新型コロナウイルスの感染の早い収束を願っております。

横山宏太郎

次号原稿締め切り 2020年4月16日
原稿送り先: 横山宏太郎

発行日 2020年3月25日
発行者 京都大学学士山岳会 会長 幸島司郎
発行所 〒606-8501
京都市左京区吉田本町(総合研究2号館4階)
京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究
研究科 竹田晋也 気付
編集人 横山宏太郎
製作 京都市北区小山西花池町1-8
(株)土倉事務所